

TV CAMARA Palavrateria 2012年6月27日放送

聞き手: Amneres Santiago

ゲスト: ルイス・ニシモリ (Luiz Nishimori) 下院議員・社会民主党 (Partido da Social Democracia Brasileira: PSDB-PR, Paraná) バラナ州選出

聞き手: みなさん、こんにちは。みなさんはアフリカにおける農業開発の促進するためのプロジェクト、ブラジル・日本・モザンビークによる共同事業プロサバナをご存知でしょうか。これは下院の農業委員会に支持され、2010年に閣印されたものです。本日はこの話題についてお話しただくため、社会民主党バラナ州選出のルイス・ニシモリ下院議員をお招きしました。ニシモリ議員は下院における多様な国際的な議題に精通しています。(ニシモリ氏に向かって) ようこそおいでくださいました。このお仕事について、このプロジェクトがどのように具体化されてきたのか、簡単にご紹介いただけますか。

ニシモリ議員: 数年前になりますが2010年にブラジル・日本・モザンビーク3カ国によって社会経済な課題、特にモザンビークにおけるアグリビジネスの発展のために国際的な合意がなされました。なぜモザンビークなのか、まずなによりモザンビークの公用語はポルトガル語です。つまりブラジル人にとっての(言語的な)障壁はありません。そして我々ブラジル人は卓越したノウ・ハウを持っています。ブラジルのセラード開発の経験と技術をアフリカのサバナに移植することができるのです。

聞き手: セラードとサバナの植生には類似点がありますか? カアチンガ (Catinga) もこの地域に入りますか?

ニシモリ議員: まさにそのとおりです。セラードの土壌はアフリカのサバナと似ています。気候も含めて似ています。あちらでは6か月間の雨季があり、同じく6ヶ月間の乾季があり、ここのセラードと同様です。ブラジルでもそれ(雨季と乾季のサイクル)がありますね。これは大豆、綿花、トウモロコシといった穀物のプランテーション栽培を容易にします。ですから、この合意はなによりもブラジルのセラードの経験をアフリカのサバナに移植するために形成されたのです。私はこの4月に20人ブラジル人農場経営者、アグリビジネス企業家からなる提議団を率いて、プロジェクトがどのように進行しているのか、そしてアフリカのサバナの状態を確認するために、(モザンビークに) 行ってきました。そして実際にこのプロジェクトが世界の食料を生産する大きな潜在的可能性があることを、世界の食料増産の可能性を確信いたしました。アフリカ大陸も食料が不足しています。

聞き手: なるほど。目下のところ、このプロジェクトはモザンビークで展開しています。モザンビークの中西部から北部かけて回廊(開拓)がありますが、この回廊(開拓)に関して、あなたが進めているのは、農業生産、世界の食料生産のためのある種の試験場のようなものを提供するということなのではないでしょうか? 特に日本はこのストーリーにどうかかわっているのでしょうか? さらにブラジルはこの経験から何を学べるのでしょうか?

ニシモリ議員: なぜ日本政府なのかという点ですが、日本政府はブラジルのセラード開発に最も多くの投資を行った国です。その日本がアフリカのサバナの開拓に今一度、援助を行うというものです。日本政府の関心という点では、もちろん日本企業も参入するでしょう。

聞き手: それぞれ技術面においてどうなっていますか?

ニシモリ議員: そのとおりです。そこから食料を購入することもありますが、また、そこから直接購入をしなくとも、日本は食料輸入国です。彼らは食料の購入を必要とします。世界的に食料の増産がなされれば、その価格は下落し、それは日本にとって利益になります。そこで日本政府は穀物生産の拠点となるナカラ回廊の650kmの道路の舗装工事とナカラ港湾のリハビリを請け負っています。ブラジル政府はナカラ港湾の近隣にナカラ国際空港を建設することで支援しています。この地域では(ブラジルの総合資源開発企業)ヴァーレ・ド・リオ・ドーセ (Vale do Rio Doce) なども石炭や鉄鋼といった鉱物資源の採掘を行っています。そこに今度は我々のブラジル人農業労働者を連れていってあげます。ブラジルにおいて農業を行いたくとも土地が不足している若い人たちがです。

聞き手: つまり若いブラジル人農業労働者たちのために、そこへ行って働くという機会を提供するということですか?

ニシモリ議員: そうです。熱意がある若い人々が技術的で、大規模な、そして近代的な農業を行うことを望んでいます。おそらくそれはモザンビークを変革することができる、アフリカのサバナを開拓できるわけです。これは前向きな挑戦です。(ブラジルでは) 多くの農業専門家が育成されていますが、無能の状態にあります。そういった人々が挑戦できるでしょう。特にブラジル南部の土地の不足した地域で4ヘクタール、5ヘクタールといった規模で農業を営みながらも、近代的で大規模な農業を行いたいと思っている若い営農家にとっては多くの機会を提供することになるでしょう。

聞き手: ニシモリ議員はこれまでもこうした国際的な議題について積極的に取り組んでいらっしゃいました。ニシモリ議員が(ブラジルの国会にあたる) 国民会議に入られてから現在に至るまでの活動を少しお話しいただけますか。

ニシモリ議員: この公的な(政治) 人生を歩み始めて以来、私は我々の経済環境を日本や中国といったアジアの国々との関係において認識し、大きな成果を出してきました。その経験は10年以上におよび、今年、我々は日本に経済使節団を送って39周年になります。なぜ39周年なのか、来年は40周年となります。多くの人々の記憶にあるでしょう、連邦議会の大重鎮であった今は亡きアントニオ・ウエノ議員。彼がこの経済使節団を始めました。そしてアントニオ議員の生前、我々は協力して経済使節団を結成し、そしてブラジル人起業家を日本市場に引き合わせてきました。私は常にブラジル人の良きパートナーは日本人であると言いつけてきました。そしてブラジル人は日本人にとっても良きパートナーであると。なぜならば、我々の側、ブラジルには豊富な天然資源、一次産品がある。そして日本は高度な技術があることは言うまでもなく、日本には海外に投資を行う意志のある中小企業が多く存在します。そこで私は(日本の) 中小企業・産業のある都市部で座談会を開き、それらの産業がこの成長著しい国ブラジルに投資する機会を提供しているわけです。特に開発・技術の分野への投資という点でブラジルは多くの利点を提供できるでしょう。私はこの経済使節団が非常に有意義な事例であると自負しております。

1) カアチンガ (Catinga): 「カアチンガ」の名称は先住民トゥピの言葉で「白い森」もしくは「白い植生」を意味する。カアチンガはブラジル北東部の700,000 km²から1,000,000 km²の面積、つまりブラジルの領土の10%以上の面積を擁している。およそ1500万人の人々がカアチンガ地域に生活しているが、ブラジルの最貧困層と認識されている。大半の人口は収入の半数以上を農業もしくは林業に依存している。(http://reply.fo.mwb.www.ask.com/wiki/Catinga#People, http://pt.wikipedia.org/wiki/Catinga)

聞き手：本日はご出演いただきましてありがとうございました。

()内、記者補足。